

二〇二二年二月五日

雲一朶吹きのかしたる春の風  
人垣は四阿将棋春うらら  
野の香り桶に広がる菜花かな  
自転車を倒し寝転ぶ春の土手  
春立つ日退院の空晴れ渡り  
七福神巡る下町梅日和

二〇二二年二月四日

赤帽子追ひて走る子春一番  
雪しまく能登引き売りの姥の皴  
春めくや店の和菓子さくら色  
下萌や退院の靴新調す

二〇二二年二月三日

同じ雪でも今朝からは春の雪  
春光に促されつつ鉢手入  
雲は嶺にあそび我らは野に遊ぶ  
丘埋む菜の花に海展けけり  
腕時計キラリと光る村芝居  
トーストにバター良く伸び春立ちぬ

二〇二二年二月二日

湧水に上機嫌なる芹葎  
窓越しの山茶花が母励ましぬ  
文字躍るおさなの手紙あたたかし  
節分の鬼も白髪となりにけり  
洞深き老幹なれど冬芽満つ

むべ  
満天  
あひる  
智恵子  
やよい  
智恵子

素秀  
凡士  
満天  
やよい

こすもす  
明日香  
せいじ  
素秀  
みきお  
たか子

智恵子  
あひる  
あひる  
もとこ  
ぼんこ

二〇二二年二月一日

寒さうにパンジー風に震へをり  
廃業の煙突に月冴えにけり  
待春や卒寿の決意新たにし  
心身の鬱飛ばさむと春日浴ぶ  
田起こしの鋤に土塊尖がりけり  
風強き土堤踏んまへて菜花摘む

二〇二二年一月三十一日

厨窓貫きとどく春日かな  
枝絡む日に身じろぎぬ冬木の芽  
鉢植を並び替へては春を待つ  
小包に一枝庭の寒椿  
奥入瀬の絶壁めきし除雪跡  
透き間なく結ぶ神籤に冬日燦

二〇二二年一月三〇日

風花を食べんと犬の跳ねまはり  
三寒の遠嶺けさまた白変す  
手のひらに灰と産みたて寒卵  
冬薔薇寡婦なりし友訥々と  
沼滑りゆく気嵐に鳥の首  
ペダルこぐ影が併走春堤  
城壁を鏡映しに濠四温  
奥能登の岩削ぐやうに海苔を摘む  
囀りに耳動きをり膝の猫

菜々  
素秀  
宏虎  
明日香  
みきお  
あひる

明日香  
三刀  
せいじ  
みづき  
あひる  
ぼんこ

智恵子  
素秀  
みきお  
もとこ  
素秀  
あひる

たか子  
凡士  
こすもす

毎日句会みゆる選・二〇二二年二月七日